

# 作業環境を清潔に保ち、種子予措は丁寧に!!

## 1 作業環境の整備

- ・種子予措をする作業施設や周辺を清掃し、病気の伝染源となる稲わらや籾殻、米ぬか、粉塵を除去します。
- ・種子予措や育苗に使用する資材は使用前に洗浄し、汚れを落とします。前年産で病害が発生した場合は、資材に病原菌が付着している可能性があるので、洗浄と同時に器具の消毒を行います。

## 2 播種準備

○育苗計画の考え方（中苗）

品 種 (例)	田植え	育苗日数	播 種	2 日 前	催 芽	6 ~ 8 日 前	浸 種	2 日 前	種子消毒
あきたこまちR	5月25日 月 日	→(35日)→ →( 日)→	4月20日 月 日	→	4月18日 月 日	→	4月11日 月 日	→	4月9日 月 日

- ・田植え予定日と苗の種類からさかのぼって、播種日、播種量を決定します。
- ・作付面積が大きい場合や複数品種を組み合わせて作付けする場合は、作業計画をしっかりと立て、田植えが極端に遅れないようにしてください。また、老化苗とならないためにも、播種量と育苗日数に気を付けてください。

○育苗の目安（70株/坪植）

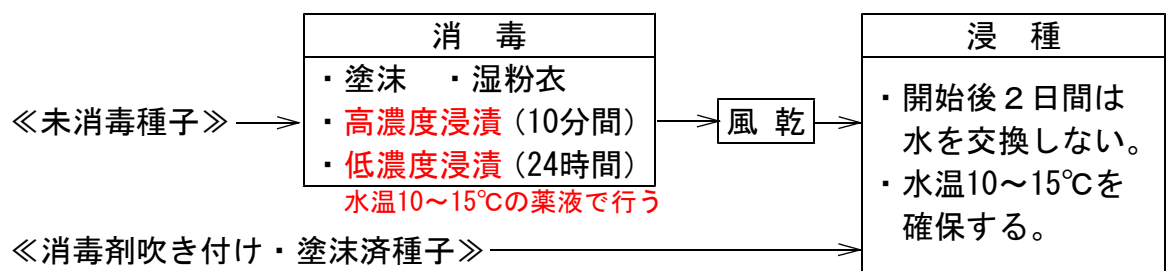
	中苗	稚苗
播種量(乾籾)	100g/箱	180g/箱
育苗日数	35~40日	20~25日
葉数	3.5~4.0葉	2.0~2.5葉
苗丈	13~15cm	10~13cm
使用箱数/10a	27箱	19箱

## 3 種子消毒と浸種・催芽作業のポイント

### 1) 種子消毒～浸種作業の流れと注意点

ばか苗病やもみ枯細菌病等防除のため、消毒、浸種の注意点を再確認しましょう。

①作業の流れ ※採種ほ産種子は、塩水選の必要はありません



### ②注意点

- ・浸種、催芽時は容器にふたをしてください。
- ・消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシートに置かないでください。
- ・複数の品種や来歴（採種ほ産とそれ以外の種子等）、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種・催芽しないでください。

- ・浸種、催芽に使用する機器や容器は、使用前及び品種や防除方法が変わる毎に十分洗浄してください。

### 【消毒時】

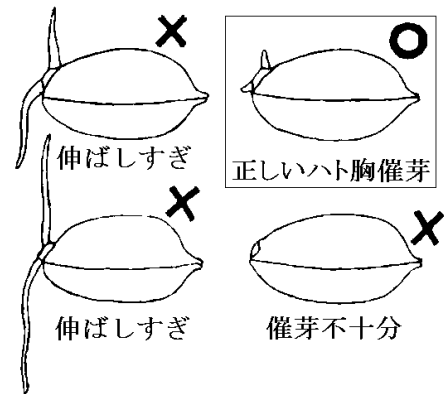
- ・浸漬法により種子消毒を行う場合は、防除効果を高めるため薬液温度は10～15℃になるよう努めます。水温が低い場合は、お湯で調整します。
- ・薬剤の効果安定・向上を図るため、いずれの消毒方法も、処理後に必ず風乾をしてください。

### 【浸種】

- ・浸種の水量は、種子容量の2倍程度（種籾1kg当たり水量3.5L）とします。
- ・籾は吸水すると容積が増えるので、種子袋に入れる量は50～60%にとどめます。
- ・10℃以下の水温で浸種すると、種子の休眠が深まったり種子消毒剤の効果が低下するので、水温は10～15℃を確保するように努めましょう。浸種期間は6～8日程度とし、浸種終了の目安は、籾殻を透かして胚が白く見えるようになった時です。
- ・種子消毒剤の安定した薬効を確保するため水交換は2～3回とします。また、消毒効果発揮のため、浸種開始から2日間は種子袋を揺すったり、水のかけ流し、循環や交換をしません。
- ・水温の確保と病原菌の侵入防止のためにできるだけ屋内で浸種してください。

## 2) 催芽のポイント

- ・袋内部の種子まで均一な温度になるよう、催芽前に36～40℃の温水で湯通しを行います。
- ・催芽は、30～32℃の温度で行います。芽の長さはハト胸程度（催芽長1mm）とし、伸ばしすぎると損傷が多くなるので注意しましょう。
- ・品種により発芽速度は異なるので、催芽時間は品種によって変えます。また、同じ品種でも年により休眠性に差があるため、発芽の程度を十分観察して催芽を終了してください。
- ・温湯浸漬した種子では、芽の動きがやや早まる場合があります。



## 3) その他

- ・生物農薬（タフブロック等）を使用する場合、ヘルシード剤、テクリード剤、スポルタック剤との体系処理、ダコニール・ダコレート・ベンレート剤の播種時処理は、生物農薬の防除効果が低下するため行わないでください（ただし、スポルタック剤はタフブロックとの体系処理が可能）。

# 4 播種作業

## 1) 床土の準備

- ・床土の施肥量が過剰になると、出芽不良や苗立障害の発生が懸念されるので注意してください。
- ・苗箱と苗床に隙間があると、乾燥しやすくなり、苗の不揃いや葉ヤケの原因となるので、苗床は均平にして苗箱を密着させるようにします。

○ 1箱当たり施肥量の目安(成分量)

	N	P	K
稚苗	各 1.5～2.0g		
中苗	1.5g	1.5g	1.5g

## 2) 播種時の注意

- ・播種機で作業を始める前に、播種量の確認を行い、適量の種が落ちるように調整してください。
- ・播種時のかん水が不十分だと出芽不良につながるなので、十分にかん水を行います。

## 5 苗立枯病の防除対策

### 1) 発生しやすい苗立枯病菌

- ・リゾープス菌：例年最も発生が多い種類で、種籾の出芽が悪くなり、出芽しても生育は劣ります。床土の過度の乾湿、出芽期間中の高温等で発生が多くなります。
- ・フザリウム菌：緑化開始間もない頃の低温、床土の過度の乾湿の場合に発生が多くなります。



リゾープス菌発生例

### 2) 耕種的防除

- ・育苗箱や育苗器を洗浄し、育苗施設を清掃します。
- ・育苗期間中は温度管理に注意するとともに、土壤の過度の乾湿を避けます。

### 3) 薬剤による防除

(県防除基準より)

使用時期	農薬名	使用量又は希釈倍率	散布液量(箱あたり)	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤	10~15g/箱	—	○					
	タチガレエースM粉剤	6~8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤	6~8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1L						
	ダコニール1000	500~1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400~600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
			1L						
	ナエファインフロアブル	1,000倍	500mL	○	○	○			
		2,000倍	1L						
	ベンレート水和剤	500倍	500mL		○				
1,000倍		1L				○			
ランマンフロアブル	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
	ランマンフロアブル <sup>1)</sup>	1,000倍		○					

1) 使用時期は緑化始期までとする。

- ・タチガレエースM粉剤は、播種時にダコニール1000またはダコレート水和剤をかん注する場合、播種5日前までに床土に混和します。
- ・床土にオラクル粉剤、タチガレエースM粉剤、ナエファイン粉剤を使用しなかった場合は、次のいずれかの薬剤ををかん注します。

【播種時】オラクル顆粒水和剤、ナエファインフロアブル

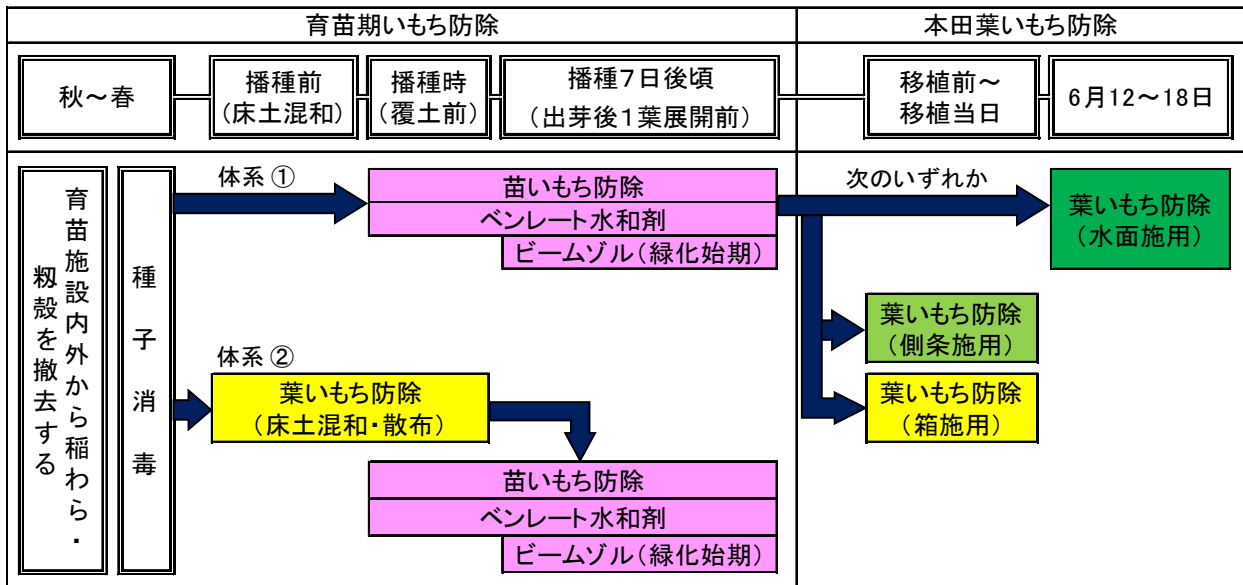
【播種時または出芽後】タチガレエースM液剤、ランマンフロアブル

- ・ タチガレエースM液剤とダコレート水和剤の播種時同時かん注は薬害が発生することがあるため避けます。
- ・ ベンレート水和剤の播種時使用は、いもち病の育苗期防除も兼ねます。

## 6 いもち病の防除対策

昨年は穂いもちの発生が平年並でしたが、葉いもちの発生が平年よりやや多くなりました。本田におけるいもち病の伝染源は、育苗施設から本田への発病・感染苗の持ち込みや、乾燥状態で冬を越した稲残渣（稲わら・籾殻）です。稲わら・籾殻を育苗施設から撤去し、苗いもち防除と葉いもち防除を適正に行うことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。

茎葉散布剤の農薬登録上の使用回数は少なく、緊急・追加防除の対応が困難であることから、育苗期のいもち防除を必ず行い、本田へのいもち病の持ち込みを防ぐことが重要となります。（県防除基準を改変）



### 【体系①】 苗いもち防除→葉いもち防除

葉いもち防除を、水面施用剤、側条施用剤、箱施用剤のいずれかにより行う体系です。

### 【体系②】 葉いもち防除（床土混和・散布）→苗いもち防除

葉いもち防除を、床土混和や播種時散布等の登録がある箱施用剤により行う体系です。葉いもち防除剤を播種時に散布する場合は、ベンレート水和剤との同時施用が可能です。

- ・ 使用する剤については、JAまたは農業振興普及課までお問い合わせください。
- ・ 高密度に播種する場合（乾籾で250～300g/箱）は、施用量が異なる場合があります。農薬のラベル等を確認し、適正な量を散布しましょう。

### 【 水稻育苗施設内での注意事項 】

水稻育苗終了後のハウスに作付けされた野菜類・花き類において、残留農薬基準値を超過する、あるいは生育障害が起こるなどの事例が発生しています。水稻育苗後に野菜類・花き類を作付けする場合は、水稻育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷き、育苗期に使用した農薬が土壌に浸透しないようにしてください。

～問い合わせは、山本地域振興局農林部農業振興普及課(TEL 52-1241)まで～